

ミュージアム・レター

Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.15

発行日 ● 平成23年(2011)3月10日

もくじ

ごあいさつ.....1

「明治の視覚革命! -工部美術学校と学習院-」展
プロローグ.....2

工部大学校・学習院・ジェラルド瓦.....3

Information.....4

- ・『学習院 目白の学び舎 - 学内に遺る歴史ある建物』のご案内
- ・史料館講座のご案内

1. ごあいさつ

学習院大学史料館では、4月8日から、展覧会「明治の視覚革命! -工部美術学校と学習院-」を開催いたします。今回の展覧会タイトルの「視覚革命」という言葉に当惑された方がありましたら、白い紙と柔らかい鉛筆を御用意下さい。まず、紙の上にだいたい同じ大きさの円を二つ、少し離して描きます。円の一つはそのままにして、もう一つに手を加えます。円の左右どちらかの輪郭の内側に何本か線を引き、指先でこすります。それだけで、円が球のように見えてきたのではないのでしょうか。陰影を付けたことにより、絵に立体感が生まれたのです。さらに、いま暗くした側の輪郭の外、やや下のほうに、横に平行線を何本か引き、また指先でこすります。これは、光が当たった球体が反対側に落とす影、つまり投影を描いたことになります。もう一つの円は紙面に留まっていますが、陰影や投影を加えた円は、球として紙面から浮き出して見えるはず。紙の上の円しか知らなかった人が、紙の上に球が描けるのを目の当たりにし、その技法をわがものとしたなら、革命的ともいえる意識と視覚の変化を経験するでしょう。明治の美術教育で起こったのが、この革命だったのです。

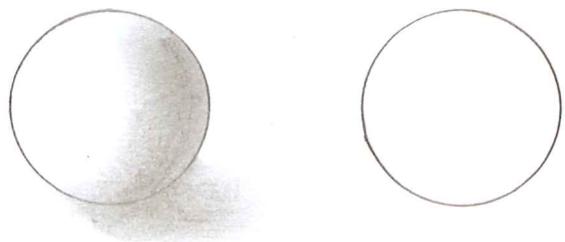
日本の伝統的絵画では光や影は描かれませんでした。光がものにあたって影ができることは誰でも知っていたはずですが、それを描くことはなかったのです。江戸末期に西洋の版画や油彩画が日本に紹介されたとき、陰影など光の効果を描く明暗法は、三次元空間をそれらしく表す線の遠近法(透視図法)と共に、現実を本物そっくり^{わざ}に捉える素晴らしい技として人々を魅了しました。そのような絵を通じて、人々はそれまで見逃していた現実の中の光と影に改めて注目したかもしれません。見様見真似で似たような効果を追求した画家もいます。明治になると、教育の場でこうした技法が組織的に教授されたのでした。

本展では、明治政府の「お雇い外国人」の教師が新たな美術教育を始めた工部美術学校の史料や、同校出身の図画教師が教えた学習院中等学科の史料などを通じて、皆様に「明治の視覚革命」を体験していただくことをめざしております。今回も多くの方々のご理解と御協力によって、展覧会を実現することができます。厚く御礼申し上げます。

(館長 高橋裕子)

平成23年度 学習院大学史料館特別展
「明治の視覚革命! -工部美術学校と学習院-」

- ◆会期 平成23年(2011)4月8日(金)~6月11日(土)
平日12:00~17:00 土曜日10:00~17:00
- ◆休館日 日曜日、祝日
但し、4/17(日)オール学習院の集いは、10:00~17:00特別開館
- ◆会場 学習院大学史料館展示室(北2号館1階)
- ◆入場無料・事前申込不要
- ◆ギャラリートーク 4月17日(日)・5月21日(土) 14:00~15:00
※史料館展示室入口にお集まりください



「明治の視覚革命！ -工部美術学校と学習院-」展

プロローグ

明治維新を経た日本政府がめざした近代化政策の柱のひとつは、工業の振興でした。それは幕末に、長州藩士・山尾庸三(1837~1917)と伊藤博文(1841~1909)らが万難を排してイギリスに密航し、彼の地の工業の発展を目のあたりにしたことに因ります。山尾と伊藤の建議により、明治4年(1871)に工学寮(のちの工部大学校)が、明治9年に工部美術学校が設立されました。

工部美術学校は、工部大学校の一機関であり日本初の官立の美術学校です。その設立の趣意書には「本校ハ欧州近世ノ技術ヲ以テ我国旧来ノ職風ヲ移シ百工ノ補助ト為サント欲ス」とあります。「百工ノ補助」が目的であるという点に、この学校の特徴が端的に示されているといえましょう。事実、イタリアからラゲーザを彫刻担当の教師として招聘し、彼の技術伝授は、洋風建築や彫刻の素材となった国産の寒水石の採鉱と発見をもたらし、また、石膏作りは窯業の技術進歩を促すなど、作品制作の枠を超え、殖産興業へとつながりました。

一方、画学ではフォンタネージが教師としてイタリアから招かれました。図画教育は、物の形を立体的に捉え、陰影や明暗、遠近を正確に描く技法が基本でした。その技術はまさに「視覚革命」と呼ぶにふさわしい、明治初頭の日本人の、物を捉える視覚に大きな変化をもたらしたと思われまます。そしてこれこそが、江戸時代までの絵画と明治以降の絵画との間に、決定的な違いを生んだのでした。

このように明治初頭の日本に大きなインパクトを与えた工部美術学校でしたが、わずか6年間しか続かず、修業し

た生徒も図画科と彫刻科あわせて60人ほどでした。しかし、その中から、浅井忠や松岡壽、小山正太郎ら、近代日本美術の基盤を形成した画家が何人も輩出しました。さらに、彼らの中には教科書を通じて、「視覚革命」を日本国中に広めた者もいました。

そのうちの1人、松室重剛(1856~1929)は、明治22年から大正10年にかけての33年間、学習院中等学科の西洋画教師を務めました。松室は、当時まだ珍しかった石膏像を用いて、工部美術学校仕込みの授業を行っていたことが写真から窺えます(図1)。また松室は明治25年に学習院専用の西洋画教科書「西式臨画帖」(全6冊)を作成しました(図2)。松室の教え子に白樺派の面々がいたことは、昨秋、当館で開催した展覧会「学習院と文学」でご紹介した通りです。

松室の教え子には建築家になった者もいました。松室が終生大切に保管していた生徒の作品の中に、渡辺仁のデッサンも含まれているのです(図3)。渡辺といえば、現在の東京国立博物館本館や銀座の和光など、私たちの身近にある名建築を設計した、昭和前期の代表的建築家です。松室の図画教育が、渡辺仁の建築家としての人生にどのような影響を与えたのか、容易には計り知れません。しかしながら、彼が図面を引く姿を想像するとき、そしてそこから世界に誇れる名建築の数々が生み出された史実を考えると、近代日本の黎明期に工部美術学校を開校した先人たちの思いがその後も脈々と受け継がれ、見事な花を咲かせていたことに改めて気づかされるのです。

(助教 鎌田純子)

1-「工部大学校所用 A GERARD YOKOHAMA 銘洋瓦」
2-「工部大学校所用植松直正製銘洋瓦」

工部大学校

「工部大学校」の文字は大鳥圭介の揮毫による



学習院虎ノ門校舎

「工部大学校」の文字が「学習院」と変わっている



工部大学校・学習院・ジェラルル瓦

工部大学校は、明治初期に工部省が設置した工業技術取得のための高等教育機関です。

明治4年(1871)工部卿伊藤博文と工部大丞山尾庸三の、工業を日本人の手で発達させるためには人材養成がまず必要との発案から、同年8月に工部省に工学寮が設置され、さらに工学校を設立して生徒を教育することとなりました。学校は同10年(1877)1月には工部大学校となり、15年に初代校長として大鳥圭介が任命されています。校舎(講堂:上記写真)は現在の千代田区霞が関三丁目にフランス人建築家のポアンヴィルによって設計建築されました。

明治18年(1885)12月の工部省廃止によって工部大学校は文部省の直轄となり、翌19年、帝国大学の設立に伴って合併され、帝国大学工科大学となりました。

明治10年(1877)神田錦町で開校した学習院は同19年、校舎を火事で焼失したため、工部大学校校舎を使用することとなりました。この時の学習院長は大鳥圭介でしたので、この移転には大鳥の働きかけがあったと思われます。しかし、このポアンヴィル設計の校舎は次の第4代学習院長三浦梧郎に「子供の教育には不適切」と判断され、学習院は同23年には四谷へと再び移転していきます。

工部大学校の講堂屋根は洋瓦で葺かれていたことが知られています。当館ではこの工部大学校で使用されていたことが証明できる洋瓦を2枚所蔵しています。いずれも昭和7年(1932)11月に男爵若王子文健より旧制学習院歴史地理標本

室に寄贈されたもので、1-「工部大学校所用 A GERARD YOKOHAMA 銘洋瓦」、2-「工部大学校所用植松直正製銘洋瓦」の名称が付されており、「震災記念品 舊工部大学屋根瓦」と書かれた和紙が添えられています。

1は、アルフレッド・ジェラルルが日本で製産した「ジェラルル瓦」とよばれるもので、横浜近郊の洋館や都内の関口カテドラル教会堂、千葉県佐倉連隊兵舎などにも使用されていたことがわかっています。ジェラルルは開国直後から横浜居留地に居住し、横浜に入港する船舶に水を供給する事業や洋瓦煉瓦製造業などを営んだフランス人です。

彼が明治24年頃に帰国するまでの日本滞在中に収集した仏像・能面などのコレクションは、故郷であるランス市美術館に収蔵されており、また墓所には日本風の鳥居が建立され、ジェラルルと日本の結びつきを物語っています。

一方の2の「工部大学校所用植松直正製銘洋瓦」は模倣ジェラルル瓦といわれるもので、銘文から植松直正の製作であることは判明していますが、植松直正がどのような人物であったかは不明です。しかし、この模倣瓦も工部大学校で使用されていたことが明らかなものです。

工部大学校……その設置者、建物の利用、建物部材からも「明治の視覚革命-工部美術学校と学習院」展をお楽しみいただければ幸いです。

(学芸員 長佐古美奈子)



図2

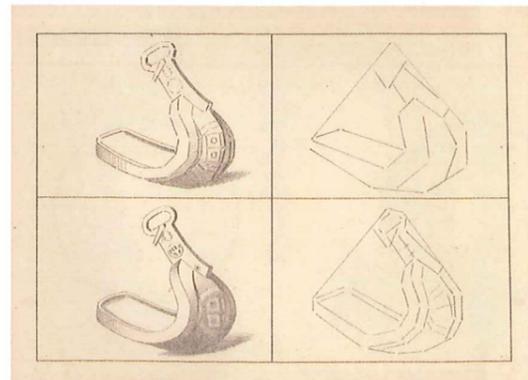


図3



図1

『学習院 目白の学び舎 — 学内に遺る歴史ある建築』のご案内

— 目白の森 — 緑の中に溶け込むように佇む、明治・大正・昭和の校舎の数々 —

2009年春、学習院目白キャンパス内の七棟の建物（正門・乃木館・厩舎・北別館・東別館・南一号館・西一号館）が国登録有形文化財に揃って登録されました。それを記念して、学習院の長い歴史と伝統を今に伝える古き懐かしき学び舎の魅力とみどころを紹介した一冊が刊行されました。この本を片手に四季折々に表情を変えるキャンパス散策を楽しんでみてはいかがでしょうか。

学習院大学史料館編

『学習院 目白の学び舎 — 学内に遺る歴史ある建築』

- 2010年11月刊行 定価1,600円＋税
丸善プラネット(株)発行

[内容]

- 第1章 目白キャンパスに遺る七棟の文化財
(正門、乃木館(旧総寮部)、厩舎 ほか)
- 第2章 目白キャンパスのなりたちを知る
(学習院の歴史—目白キャンパス前史、
学習院目白キャンパスの歴史と建造物 ほか)
- 第3章 各地に残る学習院ゆかりの建造物
(旧学習院初等科正堂、学習院初等科校舎 ほか)



第64回 学習院大学史料館講座のお知らせ

日本美術史 三粋人饒舌 — 水墨画・琳派・浮世絵の魅力 —

- ◆日時 平成23年(2011)6月4日(土)15:00～17:00
- ◆会場 学習院創立百周年記念会館1階正堂
- ◆講師 河合正朝氏(慶応義塾大学名誉教授)
河野元昭氏(秋田県立近代美術館館長)
小林忠氏(学習院大学教授・学習院大学史料館研究員)

- ◆入場無料・事前申込不要

ミュージアム・レター第15号

2011年3月10日発行

〒171-8588

東京都豊島区目白1-5-1

電話 03(3986)0221

内線 6569

FAX 03(5992)9219

Gakushuin University Museum of History

学習院大学史料館

- ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>